

『タワー』

木村菜っ葉

6, 168文字

騒がしい「ホーム」から凜は僕を連れ出した。
凜と話すことも無く、ただ一方的に見つめるだけの
幸せな日々は過ぎていく。
そんなとき時、凜に忍び寄る黒い影。
日に日に大きくなる影は僕にだけ話しかけて来た。
僕は本当に何もできないのか。凜はいったい僕を
何の為にここに連れて来たのだろう。

強面ピエロが、笑いながら舌を出している絵がプリントされた、黄緑のTシャツにダメージジーンズ。足にはクロックスという出で立ち。

目の前に立っているこの背の高い人が、若い女性だと分かるのに少し時間がかかった。

ずいぶん前からここに立ってたくさんの女の子たちを見てきたが、やはりもう少し可愛げのある女の子が良かった。小さくて可愛らしい女の子も、背の高いモデル体型のお姉さんも好きだが、服装には理想がある。やっぱり白のワンピース。

べつにいいだろ。ベッタベタな理想掲げても。こいう夢、誰もが一度は見るんだよ。そんなの思ったこともないとかいうやつ。そういうやつに限ってうんこしないアイドルとか好きだろ。そういうアイドルのトイレにかぎって汚い。僕は潔癖症というわけではないが、清潔さは何より大事だ。

こっちを見た。眉間にしわを寄せて、睨みながら近づいて来る。女の子なんだからそういう顔はやめた方がいい。右目だけ二重の目。その下にはほくろ。思ったより優しい印象だ。でも色味の無い薄い唇はギュッと閉じられたまま。僕に対してニコリともしない。僕は目を逸らした。可愛げのない女。僕の横顔をじっと見ているようだ。まあ悪い気はしない。でもそっちじゃなくて逆の横顔の方が自信あるん……

「あっ」

突然肩を掴まれた。やることも男前。ただ首に当たる指は細く華奢で、指先は爪は短く切りそろえられていて首筋に当たることは無かったが、肌は少し荒れていた。

僕はそんな女の手のぬくもりを感じながら、土日人が多く、いつも騒がしい。僕にとって「ホーム」とは名ばかりのこの家から出たのだった。

僕は女が働く店舗兼住居にある空き部屋に住む

ことになった。

部屋の窓からはその女が店で働く姿がよく見える。

女は凜という名前で、下町で『TWO TOWERS』という小さな洋菓子店を営んでいた。凜は毎朝早く起きて、ケーキや焼き菓子作りをする。髪をきっちりと後ろに結び、真っ白い制服を着た凜を初めて見た時は別人かと思った。

10時に店が開店すると、途切れることなくお客さんがやって来て笑顔で接客。小さいと思っていた口は口角が上がるとそうでもなかった。忙しいと唇が赤味を帯びる。あんな顔で笑うんだな。

「おはよう。凜さん。今日もいい天気よ。スカイツリーと東京タワーが良く見えるわ。ベリー ベリータルトはまだある？ ニホンさんのベリータルトは早く来ないと売り切れちゃうから心配なの」

この店で人気の、サクサクなタルト生地には甘酸っぱいベリーをふんだんに乗せた「ベリー ベリータルト」を必ず頼む通称ベリーおばちゃんが、いつものように開店と同時にやって来た。おばちゃんには店の名前「TWO TOWERS(トゥータワーズ)」は少々言いづららしく、お店の事を「二本(ニホン)さん」と呼ぶ。凜は嬉しそうにベリータルトを箱に詰めている。

「凜ちゃん自分のお店を持ってしばらくたっけどう？慣れた？」

おばちゃんは開店当時の常連さんらしい。

「ええ。おかげさまで。すっかり。いつもベリー ベリー サンキュ。です」

おばちゃんは爆笑。何回かに一回このやり取りがある。最初聞いた時は凜もこんなことも言うのかと驚いたが、それを言う時の二人の笑顔が可愛いので、それを見るのが僕の楽しみにもなった。

店に来る客は日に日に増えていった。従業員は凜一人しかいないので毎日とても忙しそうだ。店

を閉めた後もレジのお金を計算し、それをパソコンに打ち込み、売り上げ表とにらめっこしたあと、季節に合わせた新商品の試作を何度も行い、眠りにつくのはいつも深夜。そして、朝まだ暗いうちに起きてケーキを作る。お店は常に甘い香りで充満していて、僕はその匂いと一生懸命働く凜を見るのが好きだった。

そんなある日、凜の店に影のような物が現れるようになった。それは日に日にはっきりとしてきて、凜のそばに居座るようになった。僕から見ると不快なそれを、凜は、時に恨めしそうに、時に愛おしそうにそれを見つめるのだ。

凜はいつも通り仕事をしているのに、笑っているのに、僕は見るのが辛くなった。凜の事は見ていただけで幸せだったのに。

「おい」

突然声が聞こえた。

「おい、おまえだよ」

僕に話しかける奴なんていないはずなのに。そいつは僕の存在に気付いていたのか話しかけてきた。

「俺の事よく見てくるが、なんなんだ？」

おまえのほうは何なんだ。と言いたい言葉にはできず、

「べつに」

せめて舐められないようにと放った僕の第一声は、この上なく格好悪かった。

「お前随分前からそこにいるよな。目障りなんだよ。」

お前が目障りだ。僕が言いたい台詞を先に言いやがって。

「彼女の……凜の周りに付きまとうのはもうやめてくれないか」

言えた。何とか言ってやった。

「見ているだけのお前が何言ってるんだ。俺は凜の夢へ向かう足跡なんだよ。凜の夢が何か知ってるか？」

凜の夢？ 考えたことも無かった。いつも幸せそうだからそれでいいのだと思っていた。

「美味しいケーキでたくさんの人を幸せにすることだろ。その夢にとって俺という存在は切っても切り離せないもの。凜にとって必要なものなんだ」

「だ、だから何だ。俺はここからおまえより長く彼女を見てきた。おまえのようなやつは彼女にふさわしくない」

「なんとでも言っている。そこから出ずに見ているだけの、何にもできない引きこもりが」

僕は言葉を失った。それなりに楽しく暮らしていたから、それでいいと思っていた。その通りだった。凜に連れられてこの家に来てから初めて会話しただけにこんな事を言われるなんて。

そいつは何も言えない僕の前でますます大きな顔をするようになった。

「今日もそこから凜を眺めているだけで幸せか？」

僕は気付かないふりをした。だが僕は何もできないのにそいつの事が許せない。どうしても気になって仕方がないのだ。

この頃になると凜もそいつの顔を冷ややかな目で見るようになってきていた。

だけどそいつの態度は変わらない。そのうちに凜の表情も店も日に日に暗くなっていく気がした。

「こんにちは。凜ちゃん」

今日もベリーお婆ちゃんがやって来た。

「申し訳ありません。ベリーベリータルトはもう売り切れてしまっ」

珍しく午後に来店したおばちゃんに、凜は深々と頭を下げた。

「今日はベリータルトはいらないわ」

おばちゃんの曇った表情を見た凜は

「お体の調子でも悪いんですか？ それともなにか味に問題でもありましたか？ 何か失礼があったとか。それならお詫びを…」

凜が慌てると

「いいえ。いつも美味しくいただいているわ。ただ…」

「なんでもおっしゃってください。平里さん。平里さんは私の作ったケーキを美味しいと言って買ってくれたお客様第一号なんです」

そうだったのか。凜のケーキを買ってくれた、初めてのお客さんだったとは。平里さん（ヒラサトさんというのか）も初めて知ったようで、軽く目を見開いたが、嬉しそうに目を細め

「そうだったの。ただあなたのケーキが本当に美味しかったのよ。それ以来ずっとあなたのケーキが大好き。ベリータルトばかり買っているけどね」

とってふたりは笑った。久しぶりの笑顔だった。

「ただ、凜ちゃん。この店一人で切り盛りするのは大変じゃない？」

と凜の顔を覗き込むといった。

「はい。ありがたいことに最近お客様がたくさん来てくれるようになって嬉しいんですけど。正直、一人でこの店をやっていくにはそろそろ…」

「そうよね。気分を悪くしないでね。凜ちゃんが一生懸命なのは痛いくらい分かるんだけど、凜ちゃんの疲れとかがね出ちゃってるのかしらね。最近お店が暗く感じるわ。ニホンさんには最近行きづらくなったってご近所さんにも言われてね」

そういえば最近一時に比べてケーキの売れ残りが多くなっている事を凜は気にしていた。

ベリーおばちゃんはそれだけ伝えたと、心配そうに凜を見つめてから、体には気を付けてね。と帰っ

て行った。

夜になって凜がいつものように短い睡眠をとっている頃、そいつがまた僕に話しかけて来た。

「なあ。最近の俺は凜の中でも存在が大きくなっているみたいで、よく目が合うんだぜ。見もされないお前からしたら、羨ましいだろ？ 凜のお菓子作りの情熱が、俺を大きくしてくれるんだ。こうしていつも凜のそばでな」

こいつはなんでこんなことをいちいち僕に言うのか。

「凜の彼氏候補である俺が……」

「彼氏面すんな！」

影のようなそいつの面（つら）は見えないのに、つい怒鳴ってしまった。

「凜はお前を見ている。それは僕にも分かる。ただ、お前は大きくなり過ぎた。もう前とは違うんだ。お前も、そして僕も。」

なんとか落ち着きを取り戻しながら、僕がそう言うと、そいつはなにか言っていたが、僕にはもうどうでもよかった。さつき、僕はもうすぐここから出ることになる、という事を知ったから。

ベリーおばちゃんが帰った後、凜はお店の小さなイートインコーナーの椅子へ座るとしばらく考え込んでいた。そこでどこかへ電話していたようだ。ここからは壁が邪魔でよく見えないし聞こえない。僕には凜を見つめることしかできないのに。

僕は本当に役立たずだ。何の為にここにいるのか。あの時なぜ凜は僕を連れてきたのか。

いつものように落ち込んでいると、凜が厨房に戻

って来た。今から、昨日から悩んでいる新作ケーキをまた作るのだろう。最近では新作ケーキを作ってもなかなか気に入るような出来にはならないようだ。そばで見ている彼氏面のあいつもそれを感じているのだろうか。

凜は、厨房に向かう時は必ず、僕の前を通る。横顔。特にケーキを作りに行くこの時のまっすぐ前を見る瞳と、口角の上がった唇が僕は好きだった。私服は相変わらずで、「繊細な味で見た目も美しい」と評判の凜のケーキとは真逆の、アメリカのお菓子の様な派手な色をした変なイラストがプリントされたTシャツを着ているが、お店にいるときに着ている、白いパーティシエールの制服は、すらっとした背の高い凜に、とてもよく似合っていた。その姿は白のワンピースより美しい。凜は僕の理想の女性になっていた。

だが今日はいつもと違った。通り過ぎる前、凜が立ち止まり、凜と目が合ったのだ。初めて会ったあの時以来のことだった。

僕はここから出ることになる。

その時確信した。

次の日、いつもより遅くに凜は店に来た。私服だった。店の扉に本日臨時休業と書かれた紙を貼り、そして真っ直ぐ厨房の上の棚にいる僕の所へ向かってくると、扉を開け、僕の肩を掴んだ。

襟首が伸びきったオレンジのTシャツには、顔はネズミで体が猫(?)ぽいキャラクターが大きく口を開けて笑っている。だから、そんなダサいのを着るなよ。

首に当たる凜の細く華奢な指。肌は少し荒れているが短く切りそろえられた爪はあの時と同じように首筋に当たることは決して無い。美味しいお菓子を作り出すこの手に、あの時僕はすでに恋に落ちていたことに気付く。

「久しぶりね。この店を綺麗にするのを手伝ってね」

そう言ってまっすぐ僕を見つめる。片方だけ二重の目の奥にスプレーの形をした僕が映っている。しばらく見とれていると、瞳が細くなり、ほくろが目にくっと近づいたと思ったら凜は少し笑っていた。僕も笑っていたのだと思う。彼女の役に立てることが分かって、嬉しかったから。

僕は凜の手によってお店の壁や棚に吹きかけられ、長年にわたって蓄積された汚れを引き剥がしていった。日に日に店を覆っていく影たちはこの汚れだったのだ。

明るくなっていく店内。それを感じるたび、僕の心と体は少しずつ軽くなっていった。

「帰ったほうがいいぞ。あの棚の中から凜を見つめているのが、お前の幸せだろ？」

厨房の掃除に取りかかろうとする凜の姿を確認したのか、オーブンの近くでひときわ大きくなったあいつが僕に話しかける。

「凜。そいつをそこの上の棚に戻してやれよ」

彼氏面で話しかけても凜には聞こえない。汚れの声はお掃除洗剤の僕にしか聞こえないからだ。

「凜に必要なのはお前じゃない。洗剤である僕だ」

と格好よく言おうとした時、カランカランと店内の入口のドアが開く音がした。ドアには「本日臨時休業」と書いているはず。不思議に思って振り返ると、そこには凜より長身の一人の男性が立っていた。

「相変わらずダッサイ格好してるなあ。真っ白なコックコートを着たパティシエール姿は可愛いのに」

僕は店に入って来るなりそう言い放つ彼と、彼を見つめたまま固まってしまった凜を交互に見ていた。

「レイ！ 来るのは明日だったんじゃないの。」

やっとな声を絞り出す凜。言い方は冷たいが声は弾んでいた。

「今日は掃除の為にお店を休みにするって電話で聞いたから、早く終わらせて一緒に遊びに行こうかと思ってさ。一日早く来ちゃった」

「手伝ってくれるの？」

「もちろんそのつもりだよ」

「給料は明日の分からしか出ないわよ」

「分かってるよ。相変わらずしっかりしてるなあ。」

笑いながらそう言うと、レイはイトインコーナリーの椅子に荷物を置き、腕をまくりながら厨房に入って来た。現れた腕には無駄な脂肪は無く、きれいな筋肉の筋が現れている。服装はシャツとジーンズという恰好なのに厨房がよく似合うような気がした。チャラそうな派手な顔だったが、笑った顔は凜によく似ていた。

背の高いレイは棚の上やダクトの周りを慣れた手つきで拭いていった。二人で掃除をするとスピードは各段に上がり、厨房はみるみる綺麗になっていく。

「けっこう汚れているな。でも凜がここまで放っておいたってのは、相当忙しかったってことか」

オーブンの取っ手をきれいにふき取ったあと、オーブンの隣の大きな汚れを見ながらレイが言った。

僕と一緒にしつこい汚れを中心に掃除していた凜は、僕を置くとレイと一緒にその汚れを見つめた。

「店を開いてから、ずいぶん経ったのね。小さかった汚れがこんなに大きくなっちゃった。毎日の掃除には気を付けていたつもりだったけど、落ちない汚れまで手が回らなくて。気付かないふりしてたからさ」

凜は汚れであるあいつを愛おしそうに見つめると、そっと撫でた。

「でもこれがあたしのがんばってきた証の様な気もして……」

それを聞いて、汚れはすかさず凜に話しかけた。

「そうだ、そうやっていつも、俺を見つめてくれていたじゃないか。だからこれからも凜のそばに……」

「でも、きれいに掃除して新しいスタートを切りたい。レイがフランスから帰って来てくれた。これで今日から本当の『TWO TOWERS』になるんだから。」

あいつの言葉が無意識に遮ると、涙ぐみながら凜は言った。

「最後はここ。洗剤君。頼むね」

凜は僕の方に向き直り、僕を見つめてそう言いながら掴むと汚れに向かって強く握った。

凜とレイの手によって、あいつは消えていった。同時に僕の中はすっかり空っぽになってしまったが、心は満たされていた。

僕は役目を終えた。

消えゆく意識の中、大好きな凜の姿を見た。レイと抱き合う凜の横顔を。

綺麗になり明るくなった『TWO TOWERS』で凜とレイは今日も働く。

凜がレイと作った新作ケーキも人気は上々だ。

「おはよう。ニホンさんは今日も繁盛しているわねー。今日はこの新作のケーキと……」

「いつものベリータルトですね」

凜はベリーおばちゃんと笑っている。

おばちゃんがケーキを受け取ると、

凜、レイの声が店内に響いた。

「ベリーベリーサンキュ」